

6月7日 三位一体の主日

申 4:32～40 ロマ 8:14～17 マタ 28:16～20

1. マタ

v.19 「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け…… なさい。」

私たちが聖書を通して知る初期のキリスト教は、明らかにキリストを言い表す宣言をその信仰の本質と考えていました。キリスト教の中心点を主張するのに、キリストへの信仰を宣言すれば十分であると考えられていたのです(使 16:31、フィリ 2:6-11)。

マタイ福音書のこの三位一体定式は、信仰宣言が洗礼の際に用いられるうちに発展して行った2世紀頃の形であろうと思われます。しかしそれは変化ではなくて、原始教会が初めから持っていた信仰の、より総合的な宣言形式であったとすることが出来ます。

ローマ・ミサの解説書の中で、ユンクマンは開祭のあいさつについて次のように述べています。“けれどもこれは、世間の会合で行われるような、ありきたりのあいさつなどではない。私たちは神のもとに集まるのである。それは宗教的なあいさつであり、神からの祝福のことばに外ならない。つまり使徒の手紙の中に見られるものや、すでに典礼の中で広く慣用になったものである。開祭は宗教的なものである。そのことは、初めに十字架のしるしをすることでも、そのしるしをしながら「父と子と聖霊のみ名によって」と唱える古くからの三位一体の式文によっても、強調されている。”(ミサ pp.200-201)

ミサの“集会祈願”の結びのことばも、この三位一体定式になっています。“聖霊の交わりの中で、あなたと共に世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。”

全世界のカトリック教会は、復活節後の最初の主日に心を一つにして、“唯一の神を礼拝するわたしたちが、三位の栄光をたたえることが出来ますように”と祈ります。

2. ロマ

キリスト教の神信仰は、同時に御子キリストへの信仰であり、また聖霊への信仰であることを私たちは知らなければなりません。この信仰は、聖霊を特に教会の誕生と成長に結びつけて語ります。キリスト者は聖霊によって生まれた人であり(ヨハ 3:5-6)、その救いは神の霊がその人の内に宿っている限り確かです(8:9)。霊は命であり(8:6)、命を与えます(ヨハ 6:63、II コリ 3:6)。それ故に「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。」(v.14) 私たちはこの世の霊ではなく、「神の子とする霊をうけたのです。」(v.15) 「この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、…… 証してくださいませ。」(v.16)

同様に、キリストは命であり(ヨハ 11:25)、命を与えます(ヨハ 6:54)。そして、信仰によって私たちの心の内に住んでくださいます(エフェ 3:17)。聖霊はキリストの霊であって、「キリストの霊を持たない者は、キリストの属していません。」(8:9)

キリスト教の歴史には、誤った聖霊信仰によるいろいろな主張が、過去にも現在にも見られます。それはキリストを過去の人と考えて、それとは別に現在は聖霊が独自に働くことを期待するのです。しかし、それは間違っています。

復活されたキリストは、聖霊を通して現在もその御業を継続しておられるのであり、今も“神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるキリスト”(8:34)から切り離して、私たちは聖霊を理解してはなりません。

3. 申

v.39 「あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め……なさい。」

神はホレブで天から、火の中から民に語られました。神は先祖たちを愛され、その後の子孫を選んでエジプトから導き出し、カナンの地を嗣業として与えてくださいました。ここにはイスラエルにとっての福音の主題が述べられています。すべては神から出て、神によって保たれ、そして神に向かっているというイスラエルの信仰が宣言されています。

同じように、私たちの福音は御子に関するものであって、「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。」(ロマ 1:3-4) すべては神から出て、神によって保たれ、そして神に向かっているのです(ロマ 11:36)。

全世界の教会でこの日、“唯一の神を礼拝するわたしたちが、三位の栄光をたたえることができますように”と祈ることは、まことに尊い大切な務めであることを思い、大いに感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

6月14日 キリストの聖体

出 24:3～8 ヘブ 9:11～15 マコ 14:12～26

1. マコ

v.22 「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。“取りなさい。これはわたしの体である。”」

ローマ・ミサ典礼書の総則は、その前文の冒頭(1)で次のように述べています。

「過越の晩さんを弟子たちと共に祝い、その中で御自分のからだと血のいけにえを制定するため、主キリストは大広間を準備するようにお命じになった(ルカ 22:12)。教会は、この命令が自分にも与えられたものと常に考え、とうとい感謝の祭儀の執行に関する心構え、儀式、場所、式文について規定してきた。第二バチカン公会議の意向に基づいて定められた現行規則と、ラテン典礼の教会が今後ミサをささげるときに用いる新しいミサ典礼書とは、教会の熱意、ならびに聖体の神秘に対する信仰と変わらない愛を示すものであるとともに、多くの新しいことがらが導入されたとはいえ、教会の絶え間ない確固たる伝承をあかしするものである。」

ミサの祭儀について、なによりも先ず明確にせねばならぬことは、これがそこに臨在される復活のキリスト御自身の行為であるということです。“これをわたしの記念として行いなさい”とは、聖書に記されたあの弟子たちとの最後の晩餐を、現在に再現すること(秘跡的再現)であって、それが生けるキリストの行為であればこそ、また私たちにとっての現在の出来事となるのです(前文2)。

2. ヘブ

v.12 「……御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

ミサの祭儀を通して教会に奉仕されるキリストは、天の大祭司(v.11)です。土屋吉正著“ミサがわかる”16ページに、キリストを給仕する人、奉仕者として描いている15世紀の壁画が掲載されています。司祭を代理者として現存されるこのキリストは、かつて十字架上でただ一度成し遂げられたいけにえ(7:27)と切り離すことが出来ない大祭司なのです。

私たちのミサで再現されるのは、キリストの受肉から始まって、十字架の死によって成し遂げられた永遠の贖い(v.12)です。決して繰り返し新しいいけにえを献げるのではなくて(10:11,18)、ただ一度成し遂げられたキリストの十字架における永遠の贖いの再現なのです。

ですからミサでは感謝と賛美が、“屠られた小羊”(黙 5:12)、その完全ないけにえによって“誉れ、栄光、そして賛美をうけるにふさわしい方”(同)である復活のキリストに向けられます。ミサは決してイエスの死の追悼ではありません。復活のキリストの栄光が、私たちのミサを照らしているのです。叙唱の伝統的な冒頭

句が、これを見事に表現しています。

「聖なる父、全能永遠の神、いつでも主キリストによって賛美と感謝をささげることは、まことに尊い大切な務めです。」

3. 出

v.8 「モーセは血を取り、民に振りかけて言った。“見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。”」

これは、シナイ山で神がイスラエルと結ばれた古い契約の追憶であって、イスラエルの新年祭で朗読される祭祀伝説の一部でありました(申 31:9-13)。

それと同じように、私たちがミサをささげるとき、それは会衆が、いけにえのうちに現存されるキリストに属する贖われた民であることの、信仰的な表明となります。キリストが今や天の聖所で御自身の血によって永遠の贖いを成し遂げられたということは、もはやキリストは地上の祭壇には、実際にはおられないという意味ではありません。そうではなくて、私たちのミサの祭儀は天に向かって開かれていて、私たちは天上のすべての軍勢と共に主に栄光の賛歌を歌い、彼らの交わりに参加するのです(典礼憲章 8)。

それは、キリストが再び来られる日まで続きます。その日には、「あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ 3:4、フィリ 3:21) 主に栄光。キリストに賛美。

ハレルヤ、アーメン。

6月21日 年間第12主日

ヨブ 38:1,8~11 IIコリ 5:14~17 マコ 4:35~41

1. マコ

マルコ福音書のこの記事は、恐らく使徒ペトロ自身が語った話に基づいていると推測されています。それは他の福音書における並行記事と比べてみれば、すぐに分かることです。しかし、それはただの思い出話ではなくて、使徒たちの時代の教会にとっての重要なメッセージとして理解され、伝えられました。

v.40 「イエスは言われた。“なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。”」

イエスが弟子を叱られた話が、この他に 7:18, 8:17-18,21,33, 9:19 にも書かれていて、すべて弟子たちが「理解せず、心が鈍くなっていたから」(6:52)であったと伝えられています。これらの話は、使徒たちが原始教会の人々に、神の力を理解し、その力がキリストのうちに働いていることを信じるように(エフェ 1:19-20)と教えたメッセージなのです。

教会の外の人々(未信者)と対比して、内の人々(信者たち)には、神の国の秘密が知らされているということを、聖書は繰り返し強調しています(4:11、コロ 1:26)。キリストは救いの秘密(秘められた計画)であり、それは教会を通して進められて行く(コロ 1:27)という理解が、新約聖書と使徒後の教父たちに一貫していることを知ることは大切です。第二バチカン公会議が教会憲章の冒頭で、教会は秘跡であると表現したのは、このような伝統に基づいています。この表現は、教会憲章で4回、その他の憲章や教令の中で6回用いられていて、公会議がそれ以前のカトリック教会の伝統と不連続であるという異論に対して、教皇ベネディクト XVI が強く反論しています(VATICAN II, 2008, OXFORD)。

「イエスは鱸の方で枕をして眠っておられた。」(v.38) ヨハネ福音書にも、「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた」(4:6)という記事があります。イエスが眠っておられるから、代わりに人間が何かをしなければならぬのでしょうか。もし力及ばずに「先生、わたしたちが溺れてもかまわないのですか」(v.38)という考え方に対して、イエスは「まだ信じないのか」(v.40)と叱責されます。

嵐にもまれて漕ぎ悩んでいる初代教会に、イエスの助けの手が見えないことがありました。しかし、それでもイエスは教会と共におられる。神の御業そのものは、教会を通して進められている。「見よ、イスラエルを守る方は、まどろむことなく、眠ることもない」(詩 121:4)のです。「なぜ怖がるのか。」(v.40)

2. IIコリ

信仰というものを、イエスやその時代についてのたくさんの知識を得ることと混同している人たちがいます。「肉に従ってキリストを知る」(v.16)とは、そういうことです。そのような知識は、私たちに聖書への親近感を与えてくれますが、私たちを罪と死から救うことは出来ません(エフェ 2:1-9)。

v.17 「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。」

キリストの福音を聞き、悔い改めて信じる者となり、洗礼によってキリストの死と復活に結ばれて、もはや自分自身のためにではなく、キリストのために生きる(v.15)ということが、信仰なのです。

教会はいつの時代にも、またどこの国でもいろいろな活動をして来ました。多くの善い業、愛の奉仕が行われて、信者はこれに参加して来ました。そのような愛の業が“キリスト教”というものであるかのように、何となく思われて来ました。しかし、教会で福音が語られず、教えられることもなくて、したがって私たちを罪と死から救うキリストの福音を理解しないで、単なる人間の善意から愛の奉仕に励んでも、それはキリストのために生きることにはなり得ません。

教会が秘跡であるとは、キリスト御自身が教会を通してその御業をお進めになるという信仰の宣言なのです。「キリストがわたしを通して働かれた」(ロマ 15:18)、「働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」(I コリ 15:10)、「わたしたちは神の御前で、キリストに結ばれて語っています」(12:19)と、使徒たちに倣って私たち信者が言うためには、福音を聞いて理解することと(ロマ 10:17)、信じて新しく生まれることが必須なのです(v.17)。

3. ヨブ

神のことばを、キリストの福音を、本当に聞いて理解する人は、ヨブと共にへりくだって懺悔します。「わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論など出来ましょう。わたしはこの口に手を置きます」(ヨブ 40:4)と。そのときに初めて、私たちキリスト者は使徒と共に賛美と告白をささげることが出来ます。

「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」(II コリ 4:14)

ハレルヤ、アーメン。

6月28日 年間第13主日

知 1:13～15, 2:23～24 IIコリ 8:7～15 マコ 5:21～43

1. マコ

私たちはしばしば、現代人の感覚と目で聖書を読んでしまう……、言い換えれば、聖書を現代流の考え方で解釈してしまうという過ちを犯します。そのような馬鹿げた時代錯誤が、せっかくの信者の聖書の学びを不毛なものにしてしまわないために、次の二点を明確にする必要があります。

それは、聖書を自己流に解釈しないということと、あるがままの聖書に耳を傾けるということです。簡単のように聞こえますが、これにはかなりの自覚と訓練が必要です。“聖書をよく読む”という実際の行為の中で、このような自覚と訓練を積み重ねていくことが大切です。

福音書の中でイエスが死人を生き返らせた話は、このテキストを含めて三つありますが、いずれも初代教会が福音を宣教する中で大切な鍵のような役割を与えられています。それは、イエスはかつて“隠されたメシア”として歩まれた。人々はイエスの教えに驚き、御手の業に驚いて我を忘れた。しかし、イエスの高められた名とその救いの意味が本当に理解されたのは、復活の後であった、という使徒たちと初代教会の福音宣教の仕方の中で、これらの奇跡やいやしの出来事が語られているということです。

「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださる」(IIコリ4:14)という信仰を与えられた使徒たちが、私たちが現在読む福音書の“いわば著者”であることを知ることが、あるがままの聖書に耳を傾けるための前提なのです。

v.34 「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

イエスが彼の奇跡に出会った人々に求められたのは、驚きではなくて、悔い改めと信仰でした。イエス自身が天からの真のしるしであり、同時にイエスの行う奇跡が信じる人にはしるしでありました(マタ 11:2-16, 12:28 他)。しかし信仰のない人にとっては、それは“つまずきの石”(ロマ 9:32)、つまりただの驚きや不思議な出来事でしかないのです。

v.36 「恐れることはない。ただ信じなさい。」

死人を生き返らせた話は、イエスが「復活であり、命である」(ヨハ 11:25)ことの、あくまでもしるしとして語られているのであって、私たちはそれらの人がそのままずっと生き続けたなどと空想してはなりません。イエスは信じる人々を「終わりの日に復活させる」(ヨハ 6:40,54)メシアとして語り、またしるしを行ったために、死に渡されたのだと、ヨハネ福音書は説明しています(11:47-48, 18:36 参照)。

2. IIコリ

v.9 「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。」

使徒パウロは、ここでは“貧しい”という言葉を経済的な意味で使って、エルサレム教会の人々の欠乏を補う慈善の献げものへの参加を呼びかけています。しかしそれは、キリストの恵みから切り離された単なる人間の善意であってはなりません。それはキリストの、十字架の死に至るまでのへりくだり(フィリ2:6-9)という“貧しさ”によって与えられた贖いの恵みに、根ざすものでなければなりません。

マケドニア州の諸教会の人々は、一般的な慈善事業をしようとしていたのではなく、エルサレムの教会の信徒たちを助けようとしていました。「その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです」(1コリ8:11)ということが根拠であったことが分かります。

すべてはキリストのため(ロマ14:8)、福音のため(1コリ9:23)という信仰が、新約聖書全体の根底に脈打っているのです。

3. 知

2:24 「悪魔のねたみによって死がこの世に入り、……」

聖書を学ぶとは、使徒たちが伝えた福音に耳を傾けることです。それは、「しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したから」(ヨハ6:26)というようなものであってはなりません。

私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝しましょう。「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」(ロマ6:23)

ハレルヤ、アーメン。